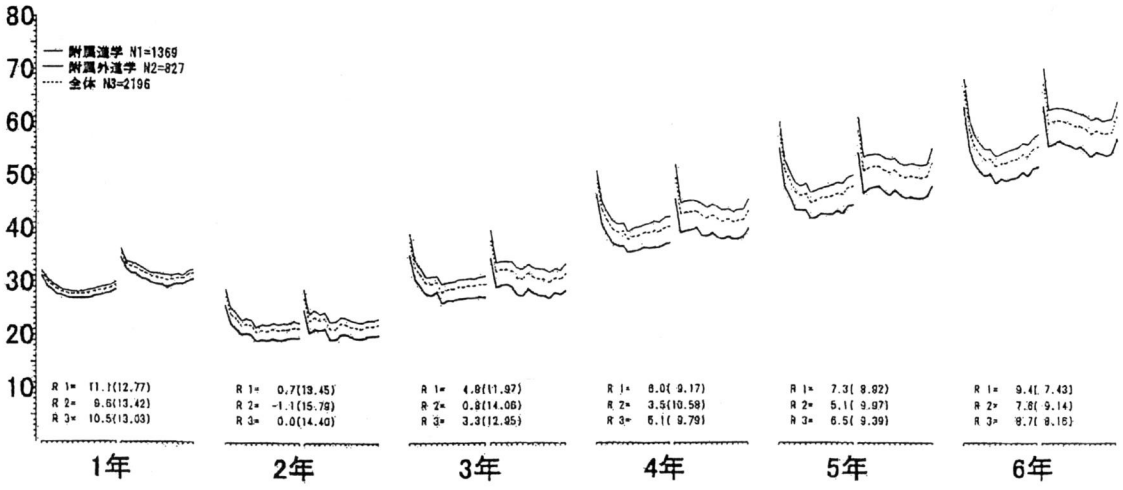

図15-1 進学進路別平均曲線

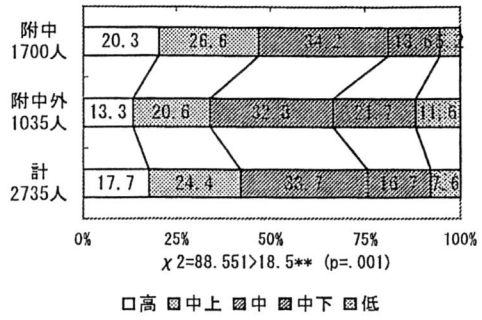

図15-2 進学先別精神健康度出現率：%

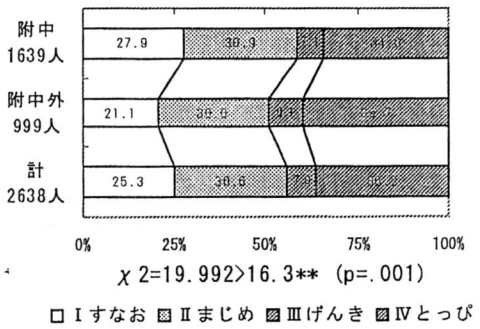

図15-3 進学先別類似人柄群別分布：%

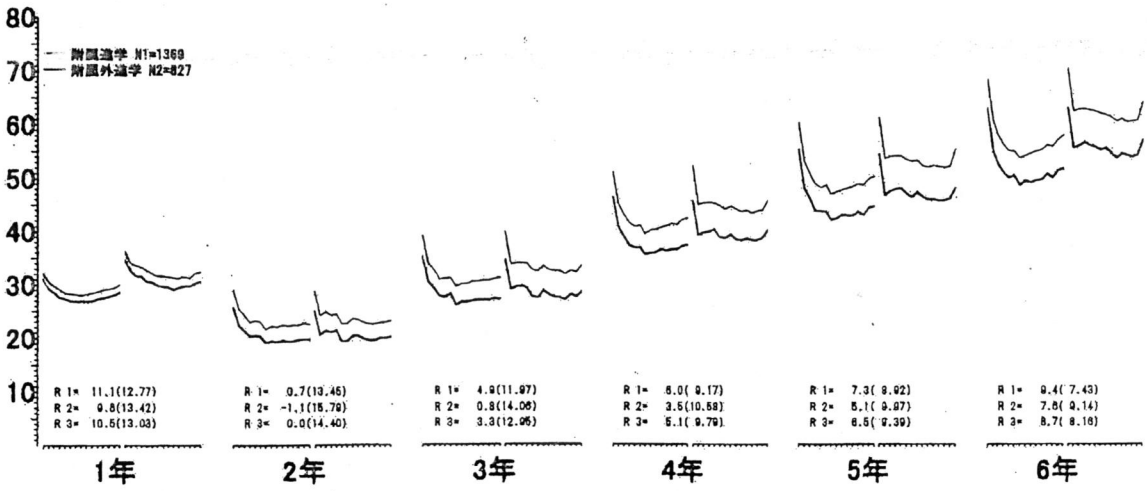

図15-4 附属中学校進学児童と附属中学校外進学児童の比較

平均曲線（図 15-4）では附中進学者の作業量と後期増加率が高い水準にあるとともに、附中外進学者の下降傾向が低学年から一貫して明らかであった。この結果は、附中進学者の心的エネルギー水準が汪溢し、精神健康度の高い特徴が象徴されているのに対して、附中外進学者は、気力や根気

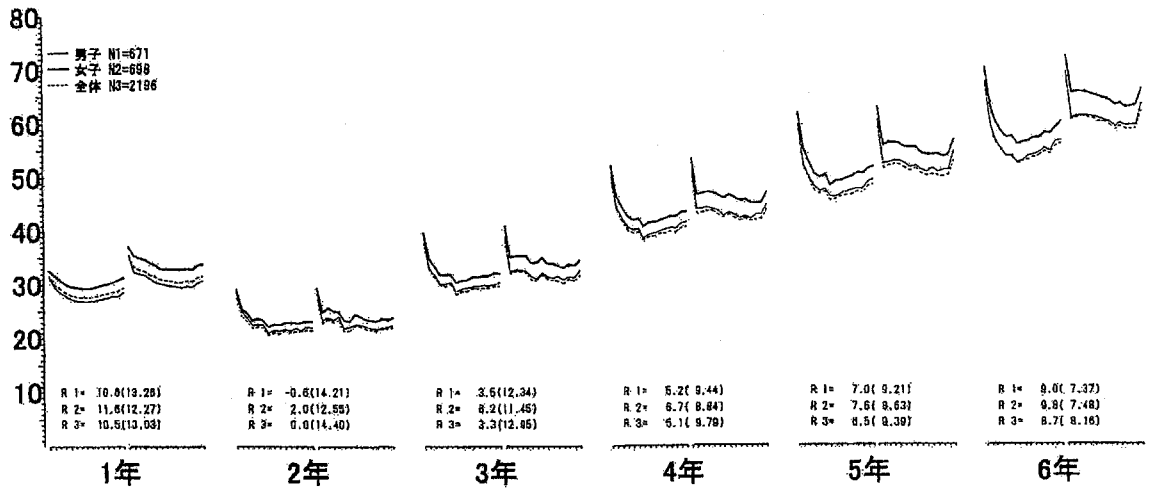

図15-5　附属中学進学児童の性別平均曲線

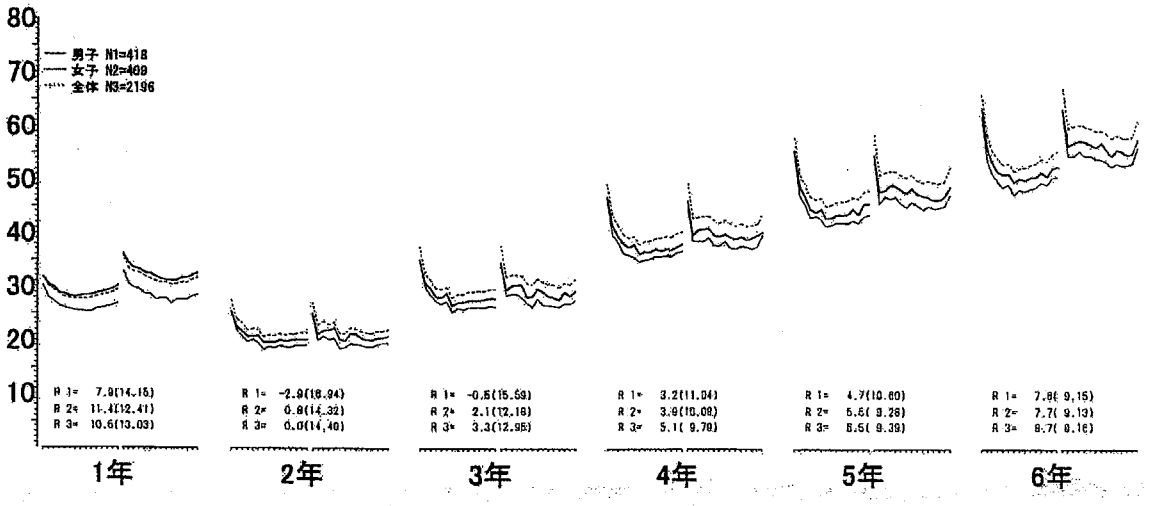

図15-6　附属中学外進学児童の性別平均曲線

の不足を示すものである。

男女差（図 15-5,6）についてみると、全平均と比べ作業量、後期増加率ともに附中進学者の女子の優位性が明らかであった。一方、附中進学者の男子は全平均と同水準であった。附中外進学者は⊗法の一年次を除いて、全平均よりも下位にあるが、女子の優位性は変わらなかった。

3）生活行動 9 項目

i　よく発言する子とほとんど発言しない子

i）平均曲線：図 16-1

平均的発言の子（太線）を真中に、よく発言する子（細線）が上段、ほとんど発言しない子（中太線）が下段に位置し、よく発言する子の第 1 行目の突出が顕著であった。これは初頭努力が速やかに働き、意志発動の速さをもつ子の特徴であり、3-2 なごやか型が好例である。適応が速く、柔軟な思考を駆使して、発言を楽しむ健康度の高さが、作業量と後期増加率の高さおよび 5、6 年次に見られる前期弯曲を示す曲線（柔軟性の象徴）とともに描かれている。ほとんど発言しない子は低学年から一貫して気力不足を意味する下降曲線を示しているが、6 年次には休効が平均的な子に近接し、作

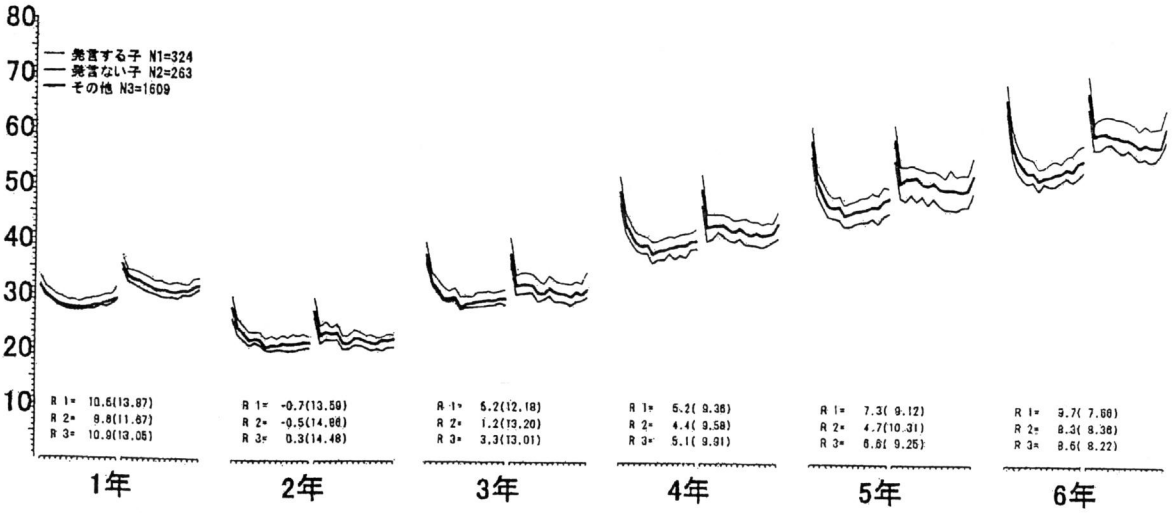

図16-1 発言の有無と児童の学年別平均曲線

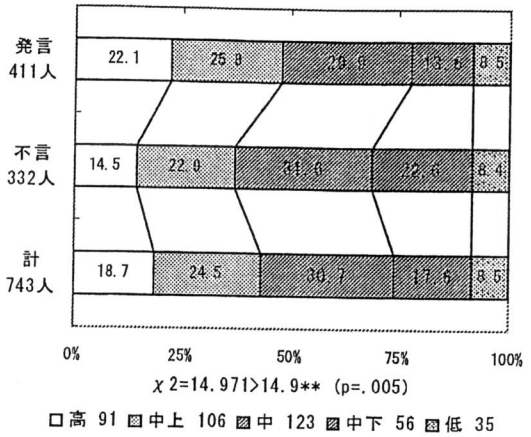

図16-2 発言の有無別精神健康度
出現率:%

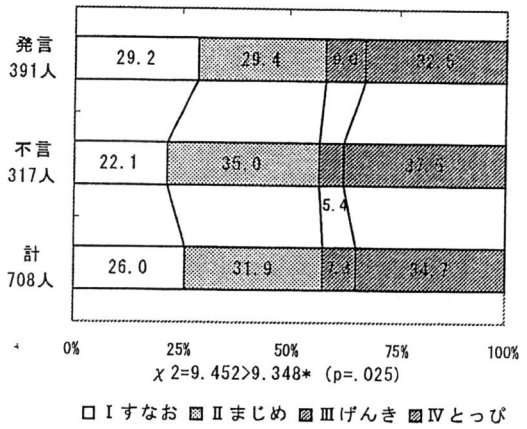

図16-3 発言の有無別類似人柄群
別分布:%

業量の差のみが残っているに過ぎない。

ii）健康度分布：図 16-2

ほとんど発言しない子と比べてよく発言する子は、健康度の高いものが多く、低いものが少なかった。とくに健康度の高度および中上度群によく発言する子が多かった。

iii）人柄型・群別分布：図 16-3

授業中に教師の発問に即応する子は適応のよい子、対人関係を苦とせず、外向的で活発な子たちであろう。よく発言する子とほとんど発言しない子の対比では人柄群別分布に差が認められる。細部を見ると素直で適応力のあるⅠ群の出現率が高く、エネルギーが外向する活動派Ⅲ群については、よく発言する子の多さは有意水準 10%の範囲であった。

一方、ほとんど発言しない子の出現率は真面目なⅡ群と突飛な子Ⅳ群の数値が高いが差は認められなかった。

iv）性差：図 16-4,5,6

よく発言する子は男子(M:F=238:174 人)、ほとんど発言しない子は女子(M:F=141:191 人)に多い。人柄群別分布に差はないが、男子に比べて女子は健康度の高度者がよく発言し、中度者が寡黙であった（資料 47, 48)。

教師の判断に基づいたよく発言する児童とほとんど発言しない児童の違いは、授業中の発言行動に基づいていると考えられる。授業中に発言できる児童は、自分は理解しているんだと言う自信が必要であろう。どの程度まで自信がある場合には発言するのかという基準には個人差がある。この個人差は、アイゼンクの向性論で証明されているように、正確さに対する基準が内向的な人は外向

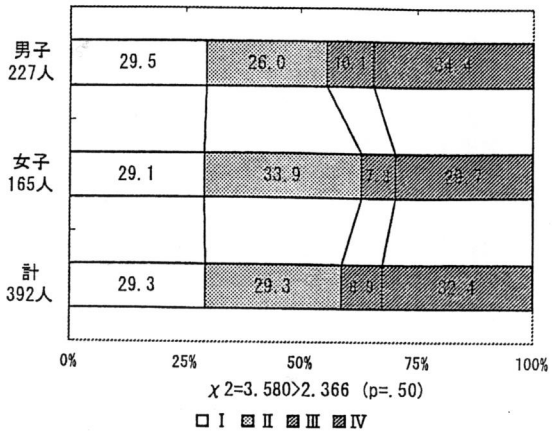

図16-4 よく発言する子の
類似人柄群別分布:%

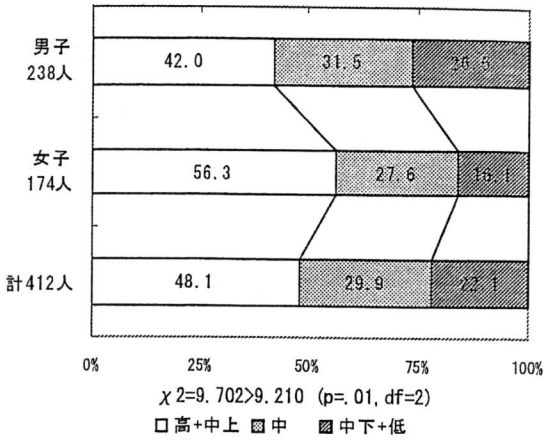

図16-5 よく発言する子の性別
精神健康度出現率:%

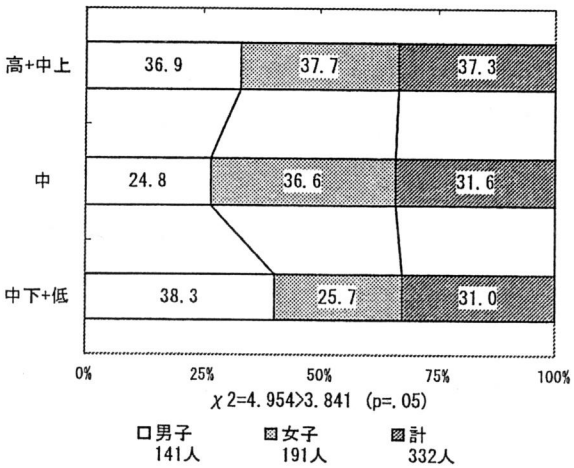

図16-6 ほとんど発言しない子の
性別精神健康度出現率:%

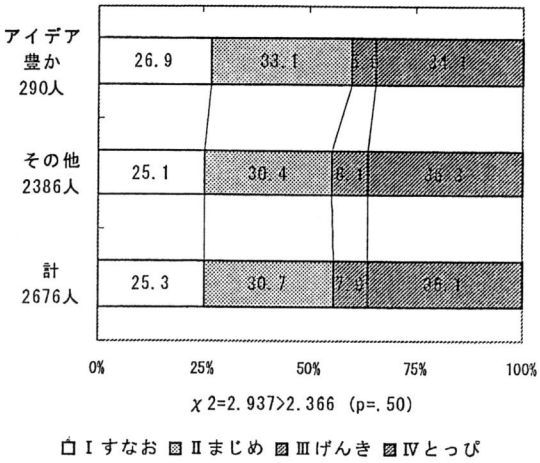

図17-1 アイデア豊かな子とその他
の子の類似人柄群別分布:%

的な人よりも厳しい基準を持っているだろうから、内向的な人は発言する回数が少なくなる可能性が高い。このことが、UK 検査の結果に表れているのではなかろうか。また、発言することによって、他の人と関わることが必要になる。この刺激を避けるために、刺激を避ける行動傾向を持つ内向的な人は発言が少なくなる可能性も高いと考えられる。

ii　アイデアの豊かな子

図 17-1 は、アイデア豊かな子とその他の子を類似人柄群別に集計したものである。両者の出現率に差は見られなかった。アイデアを出すためには、「型にはまらない」、「機知に富む」、「着想がよい」などが必要であるとされる（大川・渡辺、1990；穐山、1968）。このような特性はⅣ群とっぴな子に該当するが、彼らのアイデアがとくに豊かであるということはなかった。

図 17-2 は、アイデア豊かな子とその他の子について精神健康度別に比率の差を示したものである。彼らは、対象小学校全体の分布と同じく高＋中$_{上}$＞中＞中$_{下}$＋低であり、その他の子と比べて精神健康度上の差はなかった。図 17-3, 4 は、アイデア豊かな子を類似人柄群および精神健康度ごとに男女別に示したものである。いずれも性差は認められなかった。図 17-5 に示したアイデア豊かな子の性別発達曲線は、全平均よりも心的エネルギー水準が高い。しかし、低学年の休憩効果は必ずしも高くなく、高健康への移行は中学年からと考えてよい。創造的な思考や着想、発想の豊かさなどの知性や感性は、高学年に行くほど発達するのであろうか。性差、人柄群間差、健康度差が認められない中で、知育偏重社会への適応過程とも見ることができる。